
最後の灯火

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の灯火

【Nコード】

N1955L

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

ボクは……孤独だった。

（前書き）

久々の企画参加作品です。読んでいただくと、吠えて鳴きます。

——孤独。

ボクは生まれた時から、孤独だ。誰にも触れられず、誰にも触れない。ただ、ひたすらに永遠とも思える漆黒の闇を進む。そして、その存在は誰の目に触れることも無く、誰にも気が付かれる事はない。ボクが背負っている運命とはなんなのだろうか。どれほど悲しくても、どれほど楽しくても、それを誰かと一緒に分かち合うことは決してない。自分の運命から逃げたいと思っても、それは決して許されない。

——ボクに生まれてきた意味があるのなら、それを知りたいとボクは願う。

でも、その願いは叶うことは無い。なぜなら誰もそれを教えてはくれないから。自分で見出すことでしか、答えは分からないものだけれど、それでもひとつ、ひとつの可能性を捨てずに模索していきたい。それでもボクの心は、ボクにしか分からず、ボクの生き方はボクにしか決められない。それに対して誰かが手を差し伸べてくれるわけも無く、逆に誰かが邪魔することも決して無い。

ひょっとしたら、意味に答えなんてないのかも知れない。物事には全て意味があると思っていただけ、答えがあるとは限らない。でも、どんな些細でちっぽけなことでも、それが一番大切なことであることだって、あると思う。

ずっと、一人で歩んできたこの道は、寂しさも、楽しさもなにも

持っていない。さまざまな感情が入り混じることなく、まるで口ポットのようになだ、進むだけ。ボクと、同じ寂しさを持つモノがいるとも限らない。ボクは唯一無二の存在で、ボクだけが孤独を味わっているのかも知れない。

でも、だからと言ってボクはそれを悲観的に考えることは無い。

孤独とは、案外そういうものなのかも知れない。誰かのぬくもりを知るから、孤独が怖くなる。誰かの優しさを知るから、孤独が怖くなる。一度でも、触れることを知ってしまったら、それはまるで麻薬のように自身を蝕みそして、それをひたすらに求めてしまう。

それならはじめからそれを知らなければいい。そうすれば、孤独は当たり前で、決して恐れることのないモノになるのだから。

そんなことは生まれた時から孤独なボクは、分かっているハズなのに。それなのに、ボクは思ってしまう。

——ボクは孤独だと。

ボクは孤独だという考えを持つこと自体。孤独を恐れているということ、孤独ではないなにかを知っているということ。そういう迷いや不安でさえ、それが正しいモノなのかどうか分からない。ましてや、それは本能的なものなのかも知れない。ボクが生み出した、偽者のコトなのかも知れない。生まれてから一度も触れたことの無いボクは、孤独以外の何も感じたことはない。

それなのに、孤独を恐れ、自分の生まれてきた意味を求める。

それはなぜか、原因は分かっているのかも知れない。どこまでも

永遠に続く漆黒の闇の中、”光”が見えている。まるで、ボクに差し伸べれた手のように、それは気が付けばそこにあった。ボクは不思議だった。今まで誰も、ボクに触れようとしなかったし、触れることすら出来なかった。でも、その光は確実にボクを捕らえ、そして導いていた。ボクも勇気を出し、その差し伸べれた手を掴む。

ボクはその光に吸い込まれるように、闇を突き進む。その光は希望という名の光なのか。ボクに生きる意味を与えてくれる光かも知れない。そんな淡い希望を持ってしまったのも、仕方が無いことなのかも知らない。それほど、その光は今までボクが知ることがないほどの、大きな光なのだ。この世にこんな光があること自体ボクの常識を逸していた。

その光に近づけば、近づくほどに、その光は大きくなる。それと同時に、ボクの身体は熱くなる。これが触れるということなのか。触れ合うことで、温かみを知り、その偉大さを知る。なんの抵抗もなく、何者も拒むことなく、全てを受け止めるこの光は、寂しさや孤独を取り除き、逆に希望を与えているかのようにだった。

その光は、ボクよりも遥かに大きく、ボクの全身を大きく、そして温かいもので包み込む。包み込まれたボクの身体は赤みを増し、そして——知る。

ボクの生まれてきた意味は、ここにあった。

ボクを大きな光で包み込むそれは、何よりも大きく、偉大で、そこに存在する全てのものを包み込んでいた。ボクは知った。孤独で生まれてきた意味を。孤独は悲観するものでもなく、それが当たり前だと思つものでもない。ましてや、絶望ではない。

孤独を知ること、孤独以外のそれを知った時、その喜びはとてつもないモノになる。ずっと漆黒の闇を進んできた。でもそれは決して無駄ではなかった。ボクの身体は崩壊していくけど、そこに光がボクを導いた意味を見出した。

だってボクは今、孤独以外を知り、そして生まれてきた意味も知った。ボクが求めていたのは、このぬくもりだった。直接的な温かみではない。心から満たされるこの強くて大きなぬくもり。ボクは達成し、楽しさや悲しみ、多くの感情を共有する。命が尽きるのではない。それは新しいものを生むのだ。

ボクを見るために、みんながボクを見上げる。ボクは、この瞬間生まれてきた意味を果たした。悔いも無く、迷いや不安もない。ボクははつきり言える。ボクは生まれて初めて、笑うことを知った。生まれて初めて、共有した。生まれて初めて、悲しみを知った。そして、この大きな光の一部となり、触れ合い、温かみを知り、孤独ではなくなった。

ありとあらゆる感情、正の感情も、負の感情も、全ての感情がボクに集められる。ボクの孤独だった世界は、孤独ではないことを知り、世界中がボクを見ることでボクの心は満たされた。誰にでも生まれてきた意味はあるんだと実感した。

誰にもその存在を知られることがなかったボクは今、誰よりも生まれてきた意味を実感している。ボクは、生まれてきて良かったと思った。この世に生まれていなければ、孤独を感じることもなかったけど、それ以上の喜びを知ることなかった。

そして様々な感情と共に、この命に最後の火を灯した。

「あ、流れ星っ！」

了

（後書き）

ちよつと分かりにくいかも知れないので簡単に補足すると、

『宇宙を漂う隕石が、地球の大気に触れて流れ星となる話』です。
ジャンルがわかんなかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955/>

最後の灯火

2010年10月9日23時36分発行